



先住民と文化人類学



植民地主義に起源を持つ知のパラドクスを意識しつつ

講師 太田 好信 氏

九州大学名誉教授、アイヌ先住民研究センター・客員研究員

司会・コメント：辻 康夫 北海道大学法学研究科・教授

開催情報

日時	2026年6月19日（金）16:30-18:00			会場地図 
場所	北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 2階 W201室 (地図)			
参加費	無 料	定 員	60名（先着順）	登録フォーム 
申込	Google フォーム(https://forms.gle/sSBYFEeWCCRzYSfK6)より事前登録			

講演概要

フィールドワークを通して、先住民の生活や文化を調査する「文化人類学」は、先住民をめぐる研究の中心を占めてきました。ところが、20世紀後半からの「脱植民地化」の動きのなかで、そのあり方は、大きな変容を迫られます。本講義では、文化人類学の展開の歴史を振り返り、未来に向けたあり方を考えます

講師紹介

太田好信（おおた よしのぶ）

1954年、札幌生まれ。1987年、アメリカ合衆国ミシガン大学大学院・博士課程修了（Ph.D.取得）。1998年から2013年まで、中米グアテマラ共和国にてマヤ語（カクチケル語）の言語復興運動の実態を調査。著書・編著書は『民族誌的近代への介入』『亡霊としての歴史』『人類学と脱植民地化』『トランスポジションの思想』『政治的アイデンティティの人類学』など多数。

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター 先住民・文化的多様性グローバル研究ユニット（GRID）

共催：法学研究科・高等法政教育研究センター

問い合わせ：GRID オフィス grid@let.hokudai.ac.jp

講演要旨

文化人類学は、ヨーロッパ諸国が帝国化し、米国が「フロンティアの終焉」を宣言したころ成立した。それは、消滅寸前にある（いまでは「先住民」と自称する）人びとの社会を記述し、その文化を収集するという論理により正当化、大学内部に制度化された知である。当時は、（民族誌家ともいわれた）文化人類学者は、現地調査（参与観察）をおこない、「現地の人びとの視点から」対象社会を描写し、放置されれば、消失しかねない文化を救済（サルベージ）するという自画像になんら矛盾を感じなかった。

しかし、現在、先住民たちによって、文化人類学の自己正当化の論理は批判され、民族誌家の自画像は大きく揺らいでいる。たとえば、先住民たちは次のように問う。社会や文化が「消滅寸前」とはどういう意味か。誰の責任なのか。民族誌は「現地の人びとの視点」を独占できるという発想は、思い上がりではないか。呼ばれもしないのに勝手にやってくる民族誌家は、植民地主義者とどこが違うのか。

ただ、以上のような批判だけが、先住民による文化人類学に対する評価ではない。文化人類学が残した先住民社会、文化や言語に関する資料が、文化や言語復興に貢献しているという報告例は多数ある。現地調査に協力した先住民たちの記憶に残った民族誌家たちの姿を、搾取者や収奪者というイメージによって語りつくすことはできない。植民地主義時代において、崩壊寸前の社会や文化（ならびに「消失寸前」の言語）の救済を目的とした文化人類学に対する評価は両価的であり、この知の未来の可能性が完全に閉ざされたとはいいきれない。

本講義では、文化人類学に内在する植民地主義に起源を持つ知のパラドクスを意識しつつ、この知と先住民との現在から未来にむけた関係を考える。

★GRID 講演会シリーズ「先住民政策・先住民研究の現在」について

「先住民族の権利に関する国連宣言」の採択から19年、「アイヌ民族を先住民族と認めた国会決議」から18年。諸国の政策と研究は大きく進展しました。各分野の専門家をお招きし、今日の先住民問題、先住民研究の全体像を俯瞰し、将来を展望します。広く皆様のご参加をお待ちしています。

本講演会は国際先導研究「先住民知に基づく国際プラットフォームの構築：先住権・文化・ウェルビーイングの探究」による事業です。